



わたしが認知症になったら

6月18日第15回総会を終えました。お忙しい中参加くださった皆さま、ありがとうございました。

前年度を振り返り、これからを考えるのが総会の仕事ですが、認知症カフェやみんなのコンサートなど行事の参加者、新しいボランティアなど、周辺を囲む人々も着実に増えています。これまでかわりがなかった地域の方々が、多機能ホームまどかの畑ボランティアに、えんの森のリビングルームで午前中に「体操教室」を行っている方々が午後は認知症カフェに参加されるようになりました。そして今年度4月から「だれでも食堂」が始まりました。えんという場を利用してひととき憩える、つながり合える、「地域福祉の拠点になる」ことをえんの目標に掲げていますが、一歩近づけたように思います。

恒例の記念講演は、だれでも食堂の開設を記念して『子どもの貧困、大人ができること』と題して、「あすのば」の村尾政樹さん。P3に参加者の感想を掲載しましたので、ご一読ください。

さて、先日新座市主催講演会で認知症についてお話する機会をいただきました。これまでは認知症を理解して当事者をサポートしようという点に力を入れてきましたが、生涯に二人にひとりが係るという認知症、自分自身がこの病気の当事者になることを予想して、どんな心構えやサポート体制があったら安心して暮らせるのか、一緒に考えていくことに重点を移したいと考えました。残念ながら、アルツハイマー型やレビー小体型など多数が罹る認知症は発生のメカニズムが確定できず、根治治療の方法はありません。しかし、若年性認知症患者の中には、認知症であることを疑われるほど活躍されている方々がいらっしゃいます。自分自身が「忘れる病気」であることを自覚し、サポートしてくれる人に囲まれて、病気と共生しているのです。

最近でも「認知症にだけはなりたくない」と口にする人はいます。そう思っている病気に自分自身がなったなら否認と混乱が強くなるだけ。多くは80才を過ぎてから症状が現れ、それも皆が「徘徊」や「妄想」などを繰り返す重い症状が出るわけではなく、年齢相応の物忘れプラスαと言える程度の方も多いのです。今「私自身」にできることは、病気を受け入れられる覚悟を育て、私の代わりに記憶してくれるサポーターを見つけられるようにすること。まあ、そんなにカンタンではありませんが、今のうちから心構えを、と本気で考えています。皆さん、いかがお考えですか。

(代表理事 小島美里)